

「皆さんは、幸せですか」こう聞かれたら、何と答えるだろうか。しばらく考える方が多いのではなかろうか。「幸せとは何か」という尺度は、人によって違うだろう。したがって、まわりから見ると幸せそうに見える人が、実はそうでないことがある。逆に、まわりからすると、幸せには見えない人が、意外とそうでなかったりする。つまりは、幸せかどうかは本人が決めることで、まわりがどうこう言うものではない。

「人間は偉くならなくても一個の正直な人間となって信用できるものになれば、それでけっこうだ。真っ黒になって黙々として一日働き、時期が来れば“さよなら”で消えていく。このような人を偉い人と自分はいいたい」

ある書籍で見かけた一節である。平明だが深遠な一つの幸福論である。

三浦綾子さんという作家がいる。代表作は『氷点』であろう。三浦さんの人生は難病の連続である。24歳で突然高熱に倒れたのが発端である。それがその後、13年に及ぶ肺結核との闘病の始まりだった。

当時、肺結核は死に至る病だった。入退院の繰り返しの中で、三浦さんは死も覚悟している。さらに悲劇が重なる。脊椎カリエスを併発。ギブスベッドに固定され、動かせるのは首だけで寝返りもできず、来る日も来る日も天井を目にするのみ。排泄は一人ではできず、すべての世話はお母さんがした。

そんな生活が4年も続いたとは想像を超える。そこに一人の男性が現れて結婚を申し込む。その日から薄皮を剥ぐように快方に向かい、二人は結婚する。綾子さんは37歳、ご主人は35歳だった。そして綾子さんの書いた小説『氷点』が新聞社の懸賞小説に当選、作家への道が開ける。

しかし、その後も病魔は三浦綾子さんを襲い続けた。紫斑病、咽頭がん。三大痛い病といわれる帯状疱疹が顔に斜めに発症、鼻がつぶれる。それが治ったと思ったら大腸がん。そしてパーキンソン病である。

次々と襲いかかる難病。それだけで絶望し、人生を呪っても不思議はない。だが、三浦さんは常に明るく、ユーモアに溢れていた。三浦さんは、こんなことをおっしゃっていた。

「神様が何か思し召しがあつて、私を病気にしたんだと思っています。神様にひいきにされていると思うこともあります。特別に目をかけられ、特別に任務を与えられたと。いい気なもんですね」

誰の人生にも絶望的な状況はあるだろう。だが、心が受け入れられない限り、絶望はない。同様に、誰の人生にも不幸な状況はある。しかし、心が受け入れられない限り、不幸はない。三浦さんの生き方は、そのことを教えてくれているように思う。

三浦さんが、こんな言葉を残している。

「九つまで満ち足りていて、十のうち一つだけしか不満がない時でさえ、人間はまずその不満を真っ先に口から出し、文句を言い続けるものなのだ。自分を顧みてつくづくそう思う。なぜ私たちは不満を後まわしにし、感謝すべきことを先に言わないのだろう」

幸福な人生をどう生きるか。たまに立ち止まって考えてみると、何かが見えてくる。あるいは、何か気づくことがあるかもしれない。